福崎町文化

第33号　平成29年3月15日　兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1　福崎町文化センター発行

主屋の保存修理を終えた三木家住宅　写真・桑原英文

姫路城を支える東西心柱の考察

郷土史研究
柳瀬龍吉

はじめに

「姫路城の東の心柱は、福崎町から出されたことをご存じでしょうか…。」

西播磨文化協会会合で市川町笠形神社のご神木が、姫路城の西心柱に使われている話を紹介する機会があった。その際、福崎町文化協会のある会員さんからいただいたことばだ。

そのいきさつを当協会役員の長澤秀人さん、牛尾雅一さんや担当者と一緒に調べることにした。

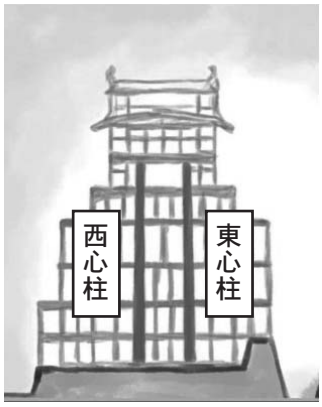
姫路城

一、姫路城と心柱

羽柴秀吉は中国攻めのため、姫路に城を構えた。しかし三層の天守であった。

そのあと、池田輝政が現在の五層の天守に作り替えた。輝政は、家康の女婿であり、西のおさえとして姫路城を任された。

彼は岐阜城・三河吉田城の城主の時、震災を経験していたので、耐震構造として二本の柱に全ての加重がかかるようにしていた。一本に約百トンがかかることになる。



その内、西心柱は笠形神社のご神木のヒノキと木曽のヒノキを三階で繋いでいる。

しかし、東心柱はどこから出て、どのように運ばれたか不明のままであった。

ところが、あるきっかけで、東心柱ではないかと考えられる重要な発見があった。それは今から約六十年前に当時の大善寺（福崎町大貫）住職であった棟廣智航さんと長男である照文さんが、寺院に保管されている古文書を整理している時に、姫路城の東心柱に大善寺の木材が使用されたと考えられる文面が見つかった。これが大善寺縁起である。

それを当時の姫路市立図書館長であった吉識利貞さんに見てもらい、さらに、吉識さんを通じて橋本政次さんへ報告した。

橋本さんは、『姫路城史』全三巻を編集した人で、姫路城に関しては最高の権威者であった。

姫路城の心柱
一本、出所わかる
築城史に新事実
福崎町 大善寺 開基縁起の巻き物から

昭和36年5月10日
（神戸新聞）

古文書を分析した橋本さんは、これは貴重な資料であると判断した。この内容を神戸新聞が取り上げた結果、多くの人々が関心を持つようになった。

二、築城史に新事実（大善寺縁起）

橋本さんの調査から、

＊紙質、筆跡、墨蹟から江戸時代前期のものに間違いがない。

＊格調高い漢文で書かれている。

＊当山（大善寺）の木を東心柱に使った。

＊輝政が三宝荒神（大善寺の裏にある）に帰依していたことがわかった。

＊巻き物の大きさは、天地三十㎝、長さ一m五十㎝、一部虫に食われているが判読できる。

＊大善寺が困っているとき、境内から心柱が出て、城主から信頼された。

＊もし、姫路城史を改訂することがあれば、大善寺縁起のことを加筆したい。

三、大善寺縁起と心柱

大善寺は

＊所在地　福崎町西大貫

＊創建年　大化元年（六四五年）

＊開　基　法道仙人

法道仙人は法華山一乗寺他四十八ケ寺を開く

＊宗　派　真言宗

慶長十四年（一六〇九年）、当時大善寺の隆玄住職は姫路城造営にあたり、三宝荒神の神木を東心柱として提供したのをきっかけに輝政と交流が深まった。

大善寺は姫路城から、鬼門の方向にあり、輝政は一宇の社＝一棟の堂＝を建立し鬼門神として祭り料を上納したと縁起に書かれている。

当時姫路城や輝政の周辺に不可解な事故・事件がたびたび起きた。

例えば、輝政の病状が悪化したり、枕元に「やまぶし」が現れたり、風もないのに姫山の木がばたばたと倒れたりした。このようなことが続くので、ゴマを焚き祈祷させると次第に静かになり、病状も回復した。（姫路城史上巻六二八ｐ）

ただこれだけで、東心柱に使われたことは証明できない。

橋本氏は木の大きさ、輝政と隆玄住職の交流から、ほぼまちがいないだろうと判断している。

池田輝政像
鳥取県立博物館所像

四、古文書を点検

昨年四月大善寺を関係者と訪ねる。棟廣照文氏の智子（禅月）夫人に貴重な資料を見せてもらった。

丁寧に保管されていた。時代を感じられる。大善寺縁起の一部には「池田輝政公姫路城造営之切佛閣之山林伐〇築之時當山有伐採為心柱城郭成就…」（〇は不明）

即ち、この山にあった大木を心柱とすることで城が完成した。

「福崎町文化」第一号（昭和六十年三月三十一日発行）に当時の大善寺住職であった棟廣照文さんがそのいきさつを投稿されている。

照文さんは、「これはあくまで寺側の記述であり、縁起などは概して誇大表現が多い。」と謙遜して書かれている。

しかし、大善寺縁起第二巻目、宝暦縁起には信憑性が感じられる。

それは宝暦十年に当時の藩の碩学であった、好古堂の伊藤蘭斎が草稿し、春日寺玄韻住職によって清書され、姫路公家臣松平孫三郎の文箱におさめられている。

また年四季、大善寺から城内へ十数人を招き大般若転読を行ったと記録されている。（姫路城史下巻二九二ｐ）

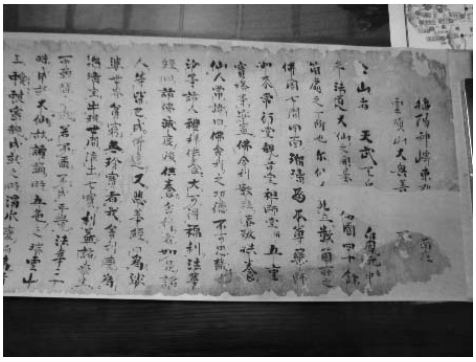
第三者によって草稿され、記述されたことによって、信憑性が高い。

しかし、照文さんは、四百年近く前のことでその木の痕跡が残っていないので確たる証拠がないといわれる。

東心柱は、大きさは全長二十四・八ｍ　直径九十八㎝であった。

木の大きさを証明するこんなエピソードが古老から伝わっている。

大門に「スエキヤ」と云う屋号の



大善寺縁起

大きな家があった。この家は心柱の末の木で一軒の家が建ったといわれている。しかし、その後改築され、その時の木が一切残っていない。もし、その時の家の一部が残っていれば、今の心柱とDNA鑑定で心柱が当地から出たことがかなりの高い確率で証明される。「スエキ」で一軒の家が建ったとなれば、相当大きな木であったといえる。

五、大善寺由来

寺の玄関の脇に由来が次のよう書かれている。

『当山は雲頂山大善寺と号し、白鳳元年に法道仙人が開祖、宗派は東寺真言宗である。

本尊に薬師如来を祀り、旧本堂・現護摩堂に不動明王、大師堂に弘法大師像、三宝荒神堂に三宝荒神、開祖法道仙人、愛宕大権現を祀る。

慶長十四年（一六〇九年）、池田輝政公の姫路城造営にあたり、三宝荒神の神木を心柱として供出したことや、当寺の位置が城から見て北東・鬼門にあたることなどから、大善寺と姫路藩との関係は密接となる。この時の大善寺住職は隆玄であり翌年、その縁起について記している。

大善寺　由来　（玄関にたててある）

また、寺僧が年三季、城中にて大般若を修法、後の酒井公の代には年四季、大般若を奉修し、城内安泰の祈願を行った。（大善寺記　伊藤蘭斎・洛西沙門玄韻）

また、寺内に「亀大師」とよばれる百八十五センチの弘法大師像があり、昔、篤信者がこの像を背負って四国八十八ケ所を巡拝したと言われ、大善寺裏山一帯には四国八十八ケ所のお砂踏み霊場がある。

また、弘法大師入定一一五〇年の記念に建立された仏舎利塔には、唐招提寺からもたらされたという仏舎利（七粒）が泰安され、阿弥陀如来や西国三十三ケ所霊場の観音菩薩三十三体（江戸中期）も安置されている。』（原文のまま）

六、三宝荒神について

荒神は、火の神であり、台所の神と言われる。一般に災難を除去する神として崇められる。

柳田國男は「阿也都古考」で民間習俗における荒神信仰が各地にあったことを説明している。

この付近の山から出たことになるが、場所は特定できていない。

姫路城心柱出所の地

三宝荒神

七、疑問点を検証

◆どのようにして搬出したのでしょう？

長さ二十五ｍもある大きな木をどのようにして運ばれたか記録を探したが見つからない。

ただ、銀の馬車道とほぼ同じコースであったと記されているが、銀の馬車道は明治に入ってからであるのでそのままとは言えない。

おそらく、農閑期に田畑に丸太を敷き詰め、キンマ（木製の運搬用具）をいくつも繋いで多くの人が引っ張ったのではないかと思われる。

◆建築に要した期間と人数は？

輝政が支配したのは、播磨五十二万石、備前二十八万石、淡路六万三千石、合計八十七万三千石の大大名であった。

各地区に人数や資材を割り当てて集めた。延べ人数は五千万人と推定できる。

期間は慶長六年（一六〇一年）から同十四年の短い期間に完成させている。

◆設計図は残っていないか？

残っていない。しかし何もなしにこれだけの巧妙、美形な建築ができ

るだろうか。考えられることは、模型を作りそれに忠実に建てたのではないかと云う説もある。

◆姫路城内でいくさをしたことがあるか？

城内のあらゆるところに不落の工夫をしている。建築以来、姫路城で戦ったことは一度もない。（「姫路城の話」橋本政次著）

しかし、城の近くでは何度か戦っている。

輝政以前の赤松貞範の時、赤松満祐の時（山名持豊が攻めてきた時）、羽柴秀吉が中国征伐の時など、いずれも城で戦っていない。

最後の城主である酒井公の時、景福寺から官軍の空砲で威喝されたが、開城を決めていたので、いくさにならなかった。

◆火災はなかったのか？

歴代城主は火災を厳しく戒めた。しかし、安永五年（一七七六年）六月七日落雷があったが、大事にいたらなかった。明治十五年（一八八二年）二月一日「リ」櫓を焼失、同年十二月二十七日備前丸を焼失した記録がある。

◆明治以降の姫路城は？

明治六年一月十四日「廃城令」が出された。

兵器の発達で戦術が一変し、今までの城郭は無用の長物になった。

これを保存するには莫大な経費がかかる。どこの城も厄介者になって次々とつぶされていった。

姫路城も競売にかけられ、入札の結果、二十三円五十銭で、姫路市米田町の神戸清一郎（かんべせいいちろう）さんが落札した。しかし、解体する財力もなく、思案のうちに月日が流れた。

明治十一年に陸軍省の管轄になり、ついに解体は免れた。しかし、手入れをすることなく、風雨にさらされた。市民のシンボルである姫路城を市民から存続を要望する声があがり白鷺城保存期成同盟が結成され国へ要望した。

これらの力が政府を動かし、明治四十三年、四十四年に国費九万円を投じて天守の大修理を完了した。大正元年（一九一二年）には土地ならびに建物を無償で姫路市へ貸し下げられた。

◆姫路の大空襲の時なぜ焼けなかったか？

昭和二十年七月三日姫路の大空襲があった。当時のアメリカの戦闘員の話では「姫路城を意識して爆撃しなかったのではないが、一面煙で見えなかった」と言っている。

しかし、城内の数カ所に焼夷弾が落ちた。天守閣には命中しなかった。戦地から帰ってきた人々が、焼け野原の中にそびえたつ姫路城をみてどれほど心をふるい立たせたか。復興への意気込みが燃え上がったといわれている。

これらの経過を検証した中では、東心柱が取り換えられた形跡はない。

復員して姫路駅に降りて最初に目についたのは姫路城だった

八、西心柱の取り換えの経緯

東心柱は補強をしているが、築城以降取り換えていない。

一方、西心柱は、昭和の大修理のとき、中心まで腐っていたので、これは取り換えなくてはいけないことになった。

そこで、文部省技官加藤得二さんは全国の林業関係者へ直径一ｍ以上、長さ二十五ｍ以上のヒノキを探してほしいと触れを出した。

早速、数カ所から連絡がはいり、現場へ出向いて調べた。ところが、空洞があったり、長さが不足していたりと、なかなか見つからなった。

もっと広範囲に探してみると、意外にも姫路から三十数キロのところに条件にみあうヒノキがあると情報が入った。それは旧瀬加村（現市川町）の笠形神社のご神木である。しかし、いくら姫路城の心柱とはいえ、昔から先祖が大切に守ってきたご神木であると、住民の中から、切ることに「待った」がかかった。城の担当者や地元の関係者が住民を説得して、何とか測量が許された。

ところが、地上十五ｍのところで

氏子たちが話し合う

わずかの歪みがあり、諦めざるを得なかった。

振り出しに戻り、考えた末、これだけのヒノキがあるのは、一度も斧が入ったことのない奥木曽にしかないのではと、木曽の営林所に依頼して、雪の中をローラー作戦で探した。

そして、目当ての木は見つかった。太さ、高さともに十分ある。ヒノキは雪解けを待って百馬力のクレーンでトロッコ道まで持ち出した。注意深く運び、貨物列車の駅まであと数キロのところで、後ろのトロッコが谷底へ「ドスン」と落ち、真二つに折れた。割れ目を見ると、折れてはいるが、半分は十分に使える。

半分は使える

加藤さんが思いついたのは、笠形神社のご神木と、折れた残りの木曽のヒノキをつなぐことである。これで西心柱の改修が実現することとなる。

地元では姫路城の心柱になるのなら、皆で祝おうと云う気運が高まった。昭和三十四年九月十二日にトレーラーに乗せられたご神木が道中の村々で止まり、集まった人々に祝い酒をふるまいながら姫路へ向かった。

祝い引き前日
旧姫路市役所前でまで運ばれる。

翌十三日上牛尾、下牛尾の住民は甘地駅から特別仕立ての五両編成の列車に乗って姫路へ向かった。そして盛大な祝い曳きに参加した。

雨の中の祝い曳き

一旦あきらめた木がふたたびお役にたったのでこの木を「運命の木」と名付けて、兵庫県中学校道徳副読本に、郷土学習資料として取り上げられている。なお、このいきさつをＤＶＤにして多くの人に見てもらっている。また、木曽の木のふるさとである中津川市へも送った。

「運命の木」ＤＶＤ
（市川町観光協会にあります）

中津川市では、伊勢神宮、出雲大社などへ材木を送り出すときは、式典をするが、この時はやった記録がないし姫路城の心柱になっていることもほとんどの人が知らなかった。

そこで中津川市、姫路市、市川町二市一町の交流を提案し、一昨年、市川町文化センターで交流会を盛大に行い、現在も交流は続いている。

今後も、東心柱が福崎町から出ていることに関しさらなる資料を見つけ、確かなものにしたい。

福崎町文化協会の会員さん、担当者、その他の皆さんの協力に感謝します。

参考文献

「姫路城史」　橋本政次著
「姫路城の話」　橋本政次著
「兵庫県道徳読本中学校心がつむぐ兵庫のきづな心かがやく」
兵庫県教育委員会
参考ＤＶＤ
「紙芝居　運命の木」
市川町観光協会

『遠野』への旅

川口正浩

岩手県遠野市と不思議な縁が生じて、平成28年10月17日～19日に同市を訪れる機会に恵まれた。

福崎町と遠野市とは、民俗学者柳田國男の名著『遠野物語』が取り持つ縁で友好都市関係にある。

柳田國男と福崎町

柳田國男（一八七五～一九六二年）は、兵庫県神東郡田原村辻川（現神崎郡福崎町辻川）で、松岡家の六男として出生し、一九〇〇年（明治33年）に東京帝大卒業後、農商務省に入り、以後、全国の農山村を歩き、主に東北地方の農村実態を調査した。

東北出身の新進作家佐々木喜善と知り合い、後に遠野に滞在して、一九一〇年（明治43年）に『遠野物語』を自費出版した。

一九一九年（大正8年）貴族院書記官長を辞任後、民間人として本格的な執筆活動に入る。

一九四九年（昭和24年）日本民俗学会を設立して初代会長に就任し、「日本民俗学の父」とよばれる。

福崎町では、辻川山の麓の辻川山公園に柳田國男・松岡家記念館を設立し、その西隣には、國男自らが「民俗学の原点（日本一小さい家）」と称した生家が移築・保存されている（写真1）。

写真１　柳田國男生家

写真２　カッパ伝説

町では、國男ゆかりのカッパ伝承を活用した町おこしを始めている。

町の清流市川に、いたずら好きの兄弟カッパがいたとして、辻川山公園の池のほとりに兄「ガタロウ（河太郎）」の像を置き、水中からは弟「ガジロウ（河次郎）」の像がぬっと現れる仕掛けを作った。ガジロウのからだは真っ赤で、筋張った手に裂けた口―、あまりにも不気味なその風貌に見物の幼児が泣き出すこともあるという（写真2）。

福崎町は、このように以前から「柳田國男生誕の地」としてＰＲに取り組んでおり、平成26年8月には、『遠野物語』ゆかりの遠野市と、従来からの交流を更に深めるべく友好都市共同宣言を行った。

柳田國男検定について

福崎町では、國男の功績と改めて向き合い、広く一般に理解を深めたいとの趣旨で、平成26年8月「第一回柳田國男検定（初級編）」を実施した。

その後、27年8月に中級編、28年8月に上級編が新設された。

そして、上級編では8人が合格したのだが、お陰さまで私が最高得点だった（写真3）。

写真３
柳田國男検定上級編最高得点賞盾

その際の副賞として、『遠野物語』の世界を体感する旅を贈呈された次第だ。

遠野市について（写真4）

岩手県の内陸部（釜石市と花巻市の中間）にあり、柳田國男著『遠野物語』の舞台となったまちである。

人口約3万人、面積は、東京23区とほぼ同じで、北上高地を形成する

写真４　遠野市近隣地図

早池峰山を始めとする山々に囲まれた盆地である。

カッパや座敷童子などが登場する民話も数多く伝わり「民話のふるさと」とも称されている。

「遠野」への旅　行程

一日目（10月17日）

市立博物館

日本初の民俗専門の博物館として昭和55年に誕生し、『遠野物語』を基軸にして遠野の民俗資料を収集し公開されている。

平成22年の『遠野物語』発刊一〇〇周年を機にリニューアルされた。

今回の訪問の際は、現地学芸員の方から詳細なご説明をいただいた。

とおの物語の館（写真５）

昔話蔵　昔の造り酒屋の蔵を改造し、古くから伝わる昔話を切り絵やイラスト、映像等で紹介している。広々とした蔵の中は、まさに昔話の世界。

写真５　とおの物語の館入口

柳田國男展示館

旧高善旅館（写真６）

柳田國男が滞在した宿で明治から昭和にかけての遠野を代表する旅籠。『遠野物語』の草創に関わった宿として移築し、國男の生涯や遠野での足跡を紹介している。

写真６　旧高善旅館

旧柳田國男隠居所（写真７）

昭和31年1月から昭和37年8月に88歳で逝去するまで、柳田國男が孝夫人と共に過ごした家。東京都世田谷区成城から移築。國男の功績や著作を紹介している。

写真７　旧柳田国男隠居所

昔話の聴ける宿あえりあ遠野

夕食の前の30分、囲炉裏のある和室ホールで、地元の語り部さんによる民話を聴いた。「昔あったずもな（そうな）」で始まり、素朴な遠野の方言混じりの語りが続き「どんどはれ（めでたし）」で終わる。

耳からだけだと率直に言って三分の一も判らないが、解読用のパンフレットが配布されるのでそれを読めば、ほぼ理解できる。（写真８）

三年前、天皇・皇后両陛下も同じ場所で、民話を楽しまれたという。

写真８　あえりあ遠野語り部ホール

二日目（10月18日）

終日、観光タクシーを利用して遠野の見所を周遊。

ふるさと村（写真９）

茅葺きの農家が点在し、昔なが

写真９　ふるさと村のかやぶき民家

らの山里の文化や暮らしを体験できる。予約をすれば、そば打ちや餅つき、陶器作り等のメニューもある。

昭和初期にタイムスリップしたような風景が随所に見られるので映画のロケ地として活用されている。

大河ドラマ「龍馬伝」、「天地人」、「真田丸」等の撮影が行われた。

伝承園

かつての農家の生活様式を再現し、伝承行事、昔話、民芸品の製作・実演などが体験できる。

両陛下は、この園の囲炉裏の間でも民話をお聴きになられたという。

カッパ淵（写真10）（写真11）

『遠野物語』では、カッパの話は5話残されている。

常堅寺の裏のカッパ淵では、カッパ捕獲許可証の所持人には、キュウリ付きの釣り竿が無償貸与されるのでカッパ釣りをする人が時々現れるが、なかなか釣れないようだ。

写真 10
カッパ捕獲許可証

写真 11　カッパ淵

デンデラ野（写真12）

『遠野物語』にも書かれている「姥捨ての丘」で、佐々木喜善の生家のすぐ近くの小高い丘である。60歳を超えた老人が村を出てここで共同生活を送り、食い扶持を減らした。

日中は、丘から下りて村の農作業を手伝い、僅かな食糧を貰い、夜には、丘へ帰って行ったそうだ。

写真 12　デンデラ野の共同住宅

三日目（10月18日）

あえりあ遠野→中尊寺（金色堂）・毛越寺→宮沢賢治記念館→空港

「遠野」への旅を終えて

今回、柳田國男が一〇〇年以上前に訪れた遠野を訪問し、その足跡の一部を辿った次第だが、その旅を終えた今、誠に感慨深いものがある。

思えば、2年半程前に、ふと目にした新聞記事がきっかけで、「柳田國男検定」を受験したのだが、その後の展開は自分でも思いがけないものがあった。

まず、40数年ぶりに福崎町を再訪して、変貌を遂げたふるさとに驚かされたが、昔、三角ベースをして遊んだ鈴ノ森神社境内と山桃の木は変わらぬ姿のままで迎えてくれて懐かしさがじんわりとこみ上げてきた。

また、検定試験の勉強を通じて、これまではよく知らなかった福崎町の歴史と習俗、國男の功績等を知ったことにより、ふるさと福崎町との絆がより強くなった感がある。

更に、『遠野物語』の世界をつぶさに体感できたことは私にとって望外の幸という他ありません。

川口正浩氏略歴
昭和13年3月
兵庫県姫路市生まれ
昭和20年7月～31年3月
福崎町（当時田原村）辻川に在住
昭和36年3月
京都大学法学部卒業
昭和36年4月～平成13年6月
大阪ガス株式会社
平成11年4月～21年3月
大阪簡易裁判所民事調停委員

第四回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学校低・中学年の部　受賞

かくしほちょじ

八千種小学校三年
木村　悠太

ぼくは、福崎町の伝統行事である「かくしほちょじ」について調べました。「かくしほちょじ」を調べようと思ったきっかけは、お父さんが代表者である当人をしていて、「かくしほちょじ」という言葉をたくさん聞くようになったからです。はじめは「かくしほちょじ」というものがどういうものなのか分からなかったけれど、調べていくうちに、古くから大切に受け継がれている伝統行事であることが分かりました。

「かくしほちょじ」とは、1月の成人の日の前日から成人の日にかけて、鍛冶屋地区で行われていて、一般には「とんど焼き」と言われる小正月行事です。子どもたちが、わらと竹で作られた「ほちょじ」を「かくす」ことから、こう呼ばれるそうです。

まず、「かくしほちょじ」の準備として、1月2日に当人と呼ばれる代表者9名が集まり、やぐらを組みます。「ほちょじ」は、当人が10月の終わりに「わら取り」、11月の終わりに「わら編み」をして作っていきます。作り方は、まとめたわらの束を3～4つずつ編み込んでいき、一本の帯のようにします。それを三角形のやぐらにまいて「ほちょじ」の完成です。

そして儀式の際には、神様にお供え物をします。供える物は、昆布や小魚などの海のものと、白菜や大根などの山のものです。また、「神様の石」と呼ばれるものが代々引き継がれており、儀式の際には、石が風邪をひかないように、とんどの中に入れて温めた後、元の場所に戻します。昔から同じ石を使って受け継いでいます。

成人の日の前日、いよいよ儀式当日です。当日は、「引き継ぎ式」や「無言の行」「きつね追い」などが行われます。「引き継ぎ式」は、成人の日の前の晩に、村中の男の人の前で行われます。今年の当人から、来年の当人へ、歴代の当人の名前を記した帳面を箸で渡します。「引き継ぎ式」が行われている間、子どもたちが村中のどこかに「ほちょじ」をかくします。当人たちは全く分からないので、探すのがとても難しいそうです。これが「かくしほちょじ」と呼ばれるいわれです。

夜中に当人たちが「ほちょじ」を見つけると、昔からきめられた場所に「ほちょじ」を組みなおします。「ほちょじ」が組み終わった後、「無言の行」と「きつね追い」を行います。「無言の行」では、ぼくのお父さんがしていた親の親と呼ばれる人がひとりで、とんどが行われる場所の近くでひと言もしゃべらず、だまって赤飯と魚を一本箸で食べます。

儀式の翌日は、早朝5時半ごろから、とんどを行います。当人は、火が消える午後9時から10時頃まで火を見守ります。これが「かくしほちょじ」です。

ぼくは、「かくしほちょじ」を調べて、「かくしほちょじ」とは、昔から受け継がれている大切な行事であることを知りました。調べる前は、とんどで習字やお正月飾りを燃やすだけなのかと思っていたけれど、儀式のずっと前から、たくさんの準備があって大変なのだということに驚きました。一つ一つに、「みんなが元気にすごせますように」「作物がたくさんとれますように」という願いが込められていて、たくさんの人の思いがつまった行事なのだと感じました。ぼくたちは4年生から参加します。「ほちょじ」をかくすのが楽しみです。ぼくのお父さん、お兄ちゃんがそうであるように、来年からはぼくも「かくしほちょじ」の伝統を引き継いで、守っていきたいと思います。

第四回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学校高学年の部　受賞

ぼくの家の周りにある施設や文化財調べ

福崎小学校五年
後藤　駿幸

ぼくは、夏休みにぼくの家の周りにある施設や文化財を調べました。動機は、家の近くでも、知らない所や行ったことのない所があったからです。また、家からの距離も調べたいと思いました。

最初は、家から五百メートルの弁天池です。

弁天池には、シルビアシジミという蝶が生息しています。日本一小さいと言われているシジミチョウ科の一種です。福崎町では、弁天池周辺のみで見られます。

弁天池から見える、中小企業大学校は、家から一キロ二百メートルです。中小企業施策の柱として、人材の育成とその対応力の強化のための、関西初の中小企業大学校として、一九八〇年に建設されました。

中小企業大学校から、農道を通って行くと医王寺があります。医王寺は、家から五百メートルです。医王寺には、神谷古墳があります。神谷古墳は、町指定文化財です。神谷古墳は、一辺約二十メートルで二段階構築の方墳です。全長十一メートルの横穴式石室で、七世紀前半につくられたと考えられています。町内唯一の方墳です。

ぼくの家から三キロ七百五十メートルのところに應聖寺があります。このお寺は天台宗で沙羅の花が咲く寺として有名で、関西花の寺二十五ヶ所の一つで、県指定文化財です。

田口に、金剛城寺があります。ぼくの家から三キロ八百五十メートルです。このお寺は真言宗の名高いお寺であり新四国三十番の札所です。このお寺は、町指定文化財です。金剛城寺から七種山へ行く途中に青少年野外センターがあります。健全な青少年の育成を目的とした山小屋テントサイト等を整えた町のキャンプ場です。家から五キロ百五十メートルです。

七種山を歩いていくと、七種の滝があります。七種の滝は、落差七十二メートル、幅三メートル県下八景、県観光百選、近畿観光百景に選ばれています。

福崎にはもう一つ大学があります。それは、神戸医療福祉大学です。家から二キロ五十メートルの所にあり、二〇〇〇年に設置された私立大学です。学部は、社会福祉学部です。

最後に、ぼくが二年後に通う福崎西中学校です。平成二十八年度の生徒数は二百三十五人で、家から六百五十メートルのところにあります。

「調べて分かった事と感想」

ぼくの家の近くに、こんな施設や文化財がたくさんあったことにびっくりしました。おじいちゃんやお母さんと福崎のことを調べて楽しかったです。ほかにも福崎の施設や文化財はあると思うので調べてみたいと思います。

神谷古墳

第四回福崎町柳田國男ふるさと賞　中学校の部　受賞

田原と八千種地域の道しるべ

福崎東中学校一年
中井　陸登

僕は、ふるさと学習として田原と八千種にある道しるべについて調べました。なぜこのテーマにしたかというと、ふだん何気なく生活している自分の家のまわりに「道しるべ」がたくさんあることに気づき、調べてみようと思ったからです。

調査方法は、神崎郡歴史民俗資料館で買った「福崎の道～辻の出会いと道しるべ～」という本をもとに、「道しるべ」をひとつひとつ探し、まとめました。

実際に僕が探した「道しるべ」は、田原で十一基、八千種で六基でした。これだけを見ると、八千種の方が数が少ないように感じるかも知れません。でも実際には僕が探しきれなかっただけで、他にもたくさんあるそうです。

それでは、実際に僕が探した「道しるべ」を紹介します。まず田原では、①北野地蔵堂、②北野西の池東、③辻川交差点、④亀坪地蔵堂の前、⑤田尻金垣内池、⑥西野の野、⑦西光寺姫ヶ池、その他に亀坪・大門の路傍にそれぞれ一つ、田尻の路傍に二つありました。次に八千種では、①長池の傍ら、②余田新田、③東大貫日光寺入り口、その他小倉・余田・庄の路傍にそれぞれ一つずつありました。

次に「道しるべ」の特徴について説明します。まず一つ目は、石柱に行き先や方向が刻まれていますが、行き先はお寺を示すものが多いと思いました。二つ目は、「右　〇〇」「左　〇〇」というように方向が刻まれていました。三つ目は、「道しるべ」は地蔵の形が刻まれているものが多く、村の人に大切にまつられていることもわかりました。四つ目は、「道しるべ」が道の拡張工事などで、元の場所から移されているものがあることや石が風化して見にくくなっているものがあるということもわかりました。特に風化しているものについてはしっかり保存し、後の世に伝えていくことも大切だと思いました。

次に「道しるべ」からわかることについて書きたいと思います。南北の道にある「道しるべ」は、但馬道が通っていたので、「ひめし」「たしま」と刻まれているものが多く、明治時代には整備され、「銀の馬車道」として使われていました。東西の道にある「道しるべ」は、北条街道が通っていたので「ほうじょう」「北条道」と刻まれているものが多かったです。「ほっけ」「法花」と刻まれているものは、加西市法華山一乗寺へお参りする法華道への「道しるべ」であるということがわかりました。

次に「道しるべ」が案内している場所について書きます。「妙徳山」「もん志ゆ」と刻まれているものは、加治谷にある妙徳山神積寺への「道しるべ」です。「日かふ寺」「日光寺」と刻まれているものは、大貫にある日光寺山日光寺への「道しるべ」です。「ほっけ」「法花」と刻まれているものは加西市の法華山一乗寺への「道しるべ」です。

最後にまとめと感想です。実際に「道しるべ」を探してみて、自分が思っていた以上にいっぱいあったのに驚きました。また、姫路を「ひ免し」と言ったり、日光寺を「日かふ寺」などと表現することや昔の街道の名前を知ることができ、本当にためになりました。

また、今はカーナビゲーションなどもあり、目的地に着くのは簡単ですが、昔の人は、「道しるべ」だけで着くというのがとてもすごいと思いました。それから「道しるべ」を苦労しながら探していたら、一緒に探してくれる親切な方がいて本当に助かりました。福崎町には優しい人がいっぱいいるということがよくわかりました。また、「道しるべ」は、南田原に少なく、八千種にたくさんあると本でわかっていましたが、見つけ出せませんでした。できたらこれから、八千種方面の「道しるべ」を時間をかけて調査し、来年の発表につなげていければと思います。

北野　地蔵堂

田尻　地蔵堂

第四回福崎町柳田國男ふるさと賞　中学校の部　受賞

巡礼道　三枝草峠から百町峠まで
～板坂の果たした役割

福崎西中学校三年
山口　華永

はじめに

私は、中学一年生の「ふるさと学習」で、私の住む板坂から夢前町に抜ける峠道を歩いてレポートにまとめました。今はほとんど人の通らない峠道ですが、実際に歩いてみると、お地蔵さんや道標があり、かつては重要な道であったことを感じました。また、この峠道は「巡礼道」の一部で、茶屋や宿屋もあったことも知りました。しかし、当時はまだ一年生で、「巡礼」の意味も十分理解できておらず、峠道を紹介しただけのレポートに終わってしまいました。

そこで、中学三年生になって改めてこの「巡礼道」について詳しく調べてみようと思ったのです。

一　巡礼、巡礼道とは

巡礼とは、「信仰を確認しより深めようと霊場を旅する」ことをいいます。日本の巡礼は、一定の地域にある霊場をめぐるのが主で、「西国霊場」の三十三ヶ所や、「四国霊場」の八十八ヶ所が有名です。

西国霊場は観音菩薩を祀っています。観音菩薩は私たちになじみの深い仏様で、三十三の姿に変え、私たちを苦難から救って下さると信じられています。三十三ヶ所巡りというのは、ここに由来があります。

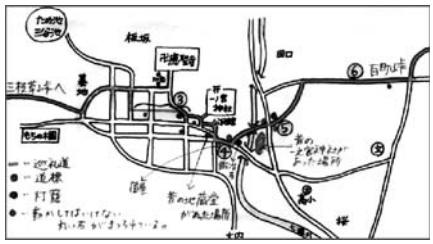
巡礼道とはこの霊場と霊場を結ぶ道のことで、板坂の巡礼道は、二十七番札所の書写山円教寺を巡礼した人たちが、二十八番札所である丹波の成相寺に向かうために利用したものです。霊場は、一般には「札所」と呼ばれています。

では、「西国霊場」は、どのようにしてはじまったのでしょうか。

もともとは、養老二年（七一八）、長谷寺の徳道上人が、悩み苦しむ人々を救うために三十三の霊場を設け、『三十三ヶ所をめぐると救われる』と説いたそうです。しかし、当時はあまり広まらず途絶えていました。

再びこの霊場が注目されたのは、その二七〇年後、花山天皇が自ら霊場を巡ったことがきっかけとなり、巡礼がさかんになりました。世間でよく知られているご詠歌は、この時に花山天皇が詠まれた歌だそうです。

江戸時代になると、巡礼は庶民の間でも盛んになりました。戦乱の世が治まり、庶民の生活にも少し余裕が出てきたのでしょう。江戸時代の巡礼者の多くは農民で、五穀豊穣や無病息災などを願い、村を代表して一生に一度だけ一年間かけて西国巡礼の旅に出ることができたそうです。このように、地域の代表として参拝することを「代参」といい、お札などをもらって帰ってきたそうです。



板坂内の巡礼道

板坂内の灯篭

百町峠入口の灯篭

百町峠入口の道標

二　板坂に残る巡礼道の名残

巡礼道の名残を調べるために、夢前町前之庄から市川町奥まで歩いてみました。

まず行ったのは、三枝草（さえぐさ）峠です。峠には、お地蔵さんがあり、この辺りに茶屋ができるほどにぎわっていたそうです。また、前之庄側の入り口には、道標があり、そこには、「ひたりなりあい」という文字が刻まれていました。

次は板坂地区内の道を調べました。田んぼの脇道から、応聖寺の下まで全長二〇〇m、幅二mたらずの細い道があります。その道沿いに灯篭があることから、巡礼道であることが分かります。巡礼道は、私たちが主に使っている道ではなく、細い路地になっていました。

田口方面に曲がるところにも、道標があり、「ひたり」という文字が

見えます。ここで左折せずにまっすぐ行ってしまう人が多かったため、道標が設けられたのかもしれません。そして、松尾橋を渡り、田口に入ります。

田口を抜けると百町（ひゃくまち）峠の入口があり、ここにも、二つの道標と一つの灯籠が立っています。道標の一つには、「右丹後成相山　左前之庄宍粟」と、もう一つには、「書写より四里　成相まで二十三里」と彫ってあります。一里は約四㎞ですから、書写山からこの地点まで十六㎞、成相まで九十二㎞キロあるということです。ほぼ正確な距離が記されていることにも驚きます。灯籠も巡礼者が道に迷わないように作られたのかもしれません。

ここを過ぎると、市川町奥へぬける百町峠へつながります。この道も民家の前を通る細い道で、車一台がぎりぎり通れるぐらいです。また、道中には、お地蔵さんやお稲荷さんもありました。

こうして、歩いてみると夢前町の前之庄から市川町の奥まで、いたるところに巡礼道の名残がみられます。要所には道に迷わないように、きちんと道標がありますし、旅の安全を祈るためにお地蔵さんも祀ってあります。現在の道と比べると狭く感じられますが、当時は自動車もない時代です。人が行き交うには十分な道幅だったと思われます。

三　板坂の果たした役割

この巡礼道において、板坂はどのような役割を果たしていたのでしょうか。

二十六番札所の法華山一乗寺から書写山円教寺までが約二十五㎞。円教寺から板坂までが約十六㎞。合わせて約四十一㎞になります。一日の行程を終えるころに、ちょうど板坂あたりに到着したのではないでしょうか。そのため、板坂は「巡礼者の宿泊地」としての役割を果たしていたと考えられます。明治末から大正時代にも、巡礼者を宿泊させる家が八戸ばかりあったそうです。

しかし、調べていくと、どうやら単なる宿泊場所ではなかったことが分かってきました。

宿泊場所を提供した家々は、「巡礼者に協力したい」という一心で、宿代をとらなかったというのです。ただ、宿泊させてもらった人も、巡礼の中で手に入れたお札などを家の人に披露するなど、御利益をお裾分けすることで、その礼に答えていたようです。

庄屋の家の近くにあった地蔵堂にも宿泊を許していたといいますから、板坂の人たちが営利を目的にしなかったことがわかります。

さらに、次のような話も残っています。

> 三河から孫を二人連れたお年寄りの夫婦が板坂に一泊したが、その夜、夫婦の容体が急に悪くなった。村の人々が必死で介抱をしたが、夫婦は亡くなってしまい、孫二人だけ残された。身の上を案じた村の人々は、この二人が安全に三河に戻れるように先々の村に取り計らい、無事に送り届けた。

というのです。幼い子どもたちのために板坂の人たちが必死になっている様子がうかがえます。

下の写真は、私の家の近くにあるお墓です。いつもきれいにしてあり、お花も供えてあります。当時は、疫病などもあったことでしょう。板坂で行き倒れた人を葬ってあると聞いています。丁重に葬り、その霊を慰めてあげていたことがわかります。

このようなことから、板坂は巡礼者が宿泊する場所を提供するだけの村ではなく、巡礼者を癒し、もてなし、いざという時には必死になって守り、支えるという大きな役割を果たしていたと考えられます。巡礼者にとってなくてはならない村だったのです。

おわりに

巡礼道について改めて調べることで、当時の板坂の人々の信仰心や人情の厚さを知ることができました。今でも静かに花が供えてあるなど、そのやさしさや人を思う気持ちは、時代を超えて現在に受け継がれていることに感動をおぼえました。そして、長年に渡り、板坂が多くの人たちを支えてきたことに、そこに住む者として誇りを感じました。

今度調べる機会があれば、板坂を出た巡礼者が成相寺にたどり着くまでの行程を調べたり、他の宿泊地になっていた地域と板坂とを比較してみたりしたいと思います。

巡礼者のお墓

福崎町制六〇周年記念
特別価格で販売中！

福崎町史
本文編2巻・資料編2巻
〈全四巻〉

第一巻　五，〇〇〇円を　**三，〇〇〇円**
第二巻　四，七〇〇円を　**二，八二〇円**
第三巻　四，〇〇〇円を　**二，四〇〇円**
第四巻　四，五〇〇円を　**二，七〇〇円**

送料一冊四七〇円
※二冊以上の場合、送料が変わります。
※平成三十年三月三十一日までの特別価格です。

○お問い合わせ先
福崎町立神崎郡歴史民俗資料館
☎〇七九〇―二二―五六九九
〒六七九―二二〇四
兵庫県神崎郡福崎町西田原一〇三八―一二

福崎町史執筆者一覧

○監修　石田善人　岡山大学名誉教授　神戸女子大学教授

○町史編集専門委員
地質・地理　田中　眞吾　神戸大学教授
考　古　松本　正信　姫路高等学校教諭
古代・中世　中野　栄夫　法政大学教授
近　世　今井　修平　神戸女子大学教授
近　世　竹下喜久男　佛教大学教授
近・現代　今西　一　小樽商科大学教授
近・現代　須崎　愼一　神戸大学教授
民　俗　千葉　徳爾　千葉県立中央博物館客員研究員

○特別執筆者
地質・地理　後藤　博弥　神戸女子大学教授
地質・地理　神吉　和夫　神戸大学助手
金石文　藤原　昭三　町史編集室長
絵　馬　金澤　勝　香寺町文化財審議委員

※平成七年三月当時の役職を記載しています。

福崎町史〈全四巻〉のあらまし

第一巻〈本文編Ⅰ〉　第三回配本　平成五年度

自然編　考古編
第一章　福崎とその周辺の自然
福崎の自然の成立／福崎とその周辺の起伏の形成／新しい時代の播磨の自然界を支配している原理・原則／最終氷期の神崎郡／福崎盆地における段丘形成
第二章　考古学からみた福崎
寒冷な気候と狩りの時代／温暖な気候と森の暮らし／コメつくりと戦いの時代／前方後円墳の時代と神崎郡

古代編　中世編
第一章　古代の播磨
律令制社会の成立と播磨国／律令制社会と播磨国／王朝国家の成立と播磨国／王朝国家期の政治制度と播磨国／荘園制社会の成立と播磨国／院政・平氏政権の成立と播磨国
第二章　中世前期の福崎
鎌倉幕府の成立とその展開／守護・地頭の設置と播磨の守護・地頭／幕府政治の展開と御家人制／中世社会の構造と播磨／鎌倉時代の福崎周辺／両統分裂と幕府の滅亡
第三章　中世後期の福崎
建武政権および室町幕府の成立と南北朝内乱／幕府政治の展開とその構造／福崎周辺の社会の動き／応仁の乱と赤松氏／戦国時代の福崎／戦国の動乱／古代・中世の福崎の文化

民俗編
第一章　福崎地域の民俗事象と全国的位置づけ
柳田（松岡）國男の記憶に残る明治前期の福崎の民俗／福崎地方における民間習俗の変遷／福崎地方住民の生活の場とその手段／地域社会の諸相とその構造／土地の名、人の名、家の名、その意義／季節の祭りと身のうえの祝い／信仰とその表現―神社・寺堂・俗信―／これからの課題―未解決の資料二、三―
福崎をめぐる古代・中世史料〔補遺〕
〔付図〕Ⅰ余色立体地図／Ⅱ福崎町小字図／Ⅲ福崎上空の最初の空中写真・福崎町航空写真

第二巻〈本文編Ⅱ〉　第四回配本　平成六年度

近世編
第一章　近世の福崎
近世社会の成立／近世社会の発展
第二章　近世福崎の文化
三木家好学の風／三木家の生活文化／辻川周辺の学芸

近代編　現代編
第一章　明治期の福崎
明治維新と福崎／播但一揆／文明開化と福崎／日清・日露戦争前後
第二章　大正期の福崎
地域産業の発展／小作争議と水平運動／諸団体と教育の台頃
第三章　昭和戦前期の福崎
大正から昭和へ／昭和初頭の福崎地域／大恐慌の襲来と満州事変／日中全面戦争と福崎地域／敗戦への道
第四章　福崎地域の戦後史
敗戦と復興への道／新福崎町の誕生／高度成長期の福崎地域

三木家住宅

別編
第一章　松岡家と柳田國男をめぐって
播磨地方の松岡姓／松岡操・たけ夫妻の生活／長兄松岡鼎の人生／次兄井上通泰の協力／六男柳田國男／軍事と学問とのはざま　松岡静雄の挫折／末子松岡輝夫／天分・教育・環境
〔付図〕Ⅰ大正期の福崎とその周辺の地形図／Ⅱ昭和四〇年代の福崎とその周辺の地形図／Ⅲ平成初期の福崎とその周辺の地形図／Ⅳ明治中期における福崎付近の地勢図

第三巻〈資料編Ⅰ〉　第一回配本　平成二年度

地質・地理編　考古・金石文編
第一章　福崎とその周辺の自然に関する資料
福崎町の地形・地質図とその説明／福崎町の表層地質／明治中期の市川実測図
第二章　福崎の原始・古代・中世資料
神崎郡における旧石器時代研究の概況／神崎郡における縄文時代研究の概況／旧神崎郡における弥生時代研究の概況／旧神崎郡内における古墳時代研究の概況／旧神崎郡内の奈良時代以降の研究の概況／福崎における中世金石文資料

古代編　中世編　近世編
第一章　福崎をめぐる古代史料
古代編年（推古期～平安時代）／古代別編（編纂物）
第二章　福崎をめぐる中世史料
播磨国関係資料／田原荘関係史料／蔭山荘関係史料／高岡荘関係史料／西治関係史料／福崎町内伝来史料／中世別編（九条家歴世記録）
第三章　福崎の近世史料
領主支配と貢租／郷帳と国絵図／村明細帳／山境・入会争論／用水の管理と争論／山野の開発／市川舟運と高瀬船／街道交通と諸負担／諸願書・諸証文・定書／困窮と一揆・騒動／寺社と祭礼
〔付図〕Ⅰ福崎町地形・地質図／Ⅱ明治中期の市川実測図

七種の滝

第四巻〈資料編Ⅱ〉　第二回配本　平成三年度

近世編（続）
第一章　近世福崎地方の文化
文芸／教育／交流
第二章　姫路藩山崎組大庄屋日誌
文久二年～文久三年／文久三年／慶応元年～慶応三年／明治四年～明治五年

近代編　現代編
第三章　明治・大正の福崎
播但一揆／政治／農業・商工業／交通・通信／生活／教育・文化・宗教
第四章　昭和戦前期の福崎
大正から昭和へ／昭和初期の福崎地域／満州事変とその影響／ゆれる福崎地域／日中全面戦争と福崎地域／破局への道の中で
第五章　福崎地域の戦後史
敗戦と戦後民主主義／新福崎町の誕生／経済・社会の変貌と福崎町／新たな時代にむけて

民俗編
第六章　住民生活の資料にみる福崎
記録に残る福崎の民俗資料／生活用具と景観
第七章　福崎町の絵馬
各地に残る松岡家の資料
第八章　福崎町の絵馬
〔付図〕Ⅰ田原村西田原小字絵図・同解説図／Ⅱ神東・神西郡地図・同福崎町部分

松岡映丘画稿「浦の島子」
柳田國男・松岡家記念館蔵

第三十五回 福崎町美術展作品募集

第三十五回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしています。

◆**会期**　平成二十九年
五月十九日（金）～
五月二十一日（日）

◆**会場**　福崎町エルデホール

◆**主催**　福崎町・福崎町教育委員会

◆**部門**　日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸
応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

◆**作品搬入**
平成二十九年五月十三日（土）
午前九時～午後四時

◆**審査員**
日本画　安惠　隆司
洋　画　志智　正
書　岡本　正志
写　真　山岡　成男
彫塑・工芸　大上　巧

山桃忌奉賛 第三十二回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

記

日　時　平成二十九年八月五日（土）
場　所　福崎町文化センター
主　催　福崎町文化協会・福崎短歌会
作　品　未発表のもの・一人二首以内
応募料　一首につき五百円
要　領　原稿用紙に楷書で縦書き
宛　先　福崎町文化センター内
文化協会事務局　宛
締　切　平成二十九年六月三十日（金）
賞　通泰賞・町長賞・議長賞・教育長賞・文化協会長賞・商工会長賞・ＪＡ兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作多数
選　者　楠田立身先生（兵庫県歌人クラブ顧問）

表紙の写真 主屋の保存修理を終えた三木家住宅

保存修理前の三木家住宅　写真・桑原英文

三木家の屋敷地は一八六一・一八㎡（約五六三坪）で、敷地内には主屋（表座敷）、副屋、離れ、内蔵、米蔵、酒蔵（酒造蔵）、角倉、厩、表門が現存し、周囲は土塀で囲まれています。これら九棟の建物すべてが、昭和四十七年に兵庫県重要有形文化財に指定されました。

主屋の建築年代は明らかではありませんでしたが、平成二十二年度から実施した保存修理工事に伴う文化財調査で、二階壁板から墨書が発見され、宝永二年（一七〇五）に建てられたことが判明しました。部屋は、表四間、裏四間の八室に分かれ、一部二階を設けています。建築当初は表西側の二室はなく、元文二年（一七三七）に増築されました。

副室、離れは安永二年（一七七三）の増築で、離れは面皮柱を用い、数寄屋風を多分に加味しています。

三木家住宅は建築当時の姿をよく残した大庄屋遺構として、建築学的に貴重であると同時に、近代においては、民俗学者・柳田國男、銀の馬車道（生野鉱山寮馬車道）との関わりも深く、地域を代表する文化遺産です。

編集後記

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十三号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。